

4. ごみ減量効果を考慮したごみ処理量

ごみ減量効果を考慮したごみの排出量をもとにして、ごみ処理量を算出します

1) ごみ焼却処理

ごみ減量効果を考慮したごみ焼却施設におけるごみ焼却量と残渣量の見込みを表 3-6-22 に、ごみ焼却施設における年間のごみ焼却量 3-6-23 及び図 3-6-8 に示します。

目標年次である平成 43 年度におけるごみ焼却施設のごみ焼却量は、1 日あたりのごみ焼却量で 23.22 t/日、残渣量で 2.47 t/日、年間ごみ焼却量で 8,475 t/年になるものと想定されます。

表 3-6-22 ごみ減量効果を考慮したごみ焼却施設における
1日あたりのごみ焼却量の見込み

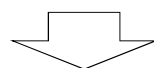
単位：t/日

	燃えるごみ		粗大ごみ (可燃性) ※1	プラスチック容器包装ペーパー 類からの可燃物 ※2	資源生ごみから の可燃物 ※3	焼却処理量 計
	家庭系	事業系				
平成29年度	14.66	11.33	0.20	0.07	1.79	28.05
平成30年度	14.25	11.33	0.20	0.07	2.02	27.87
平成31年度	13.70	11.11	0.20	0.07	2.25	27.33
平成32年度	13.17	10.88	0.20	0.07	2.48	26.80
平成33年度	12.66	10.64	0.20	0.07	2.70	26.27
平成34年度	12.17	10.41	0.21	0.08	2.93	25.80
平成35年度	11.69	10.18	0.21	0.08	3.15	25.31
平成36年度	11.23	9.95	0.21	0.08	3.37	24.84
平成37年度	10.91	9.95	0.21	0.08	3.58	24.73
平成38年度	10.49	9.72	0.21	0.08	3.79	24.29
平成39年度	10.18	9.72	0.22	0.08	4.00	24.20
平成40年度	9.78	9.49	0.22	0.09	4.20	23.78
平成41年度	9.49	9.49	0.22	0.09	4.40	23.69
平成42年度	9.12	9.26	0.22	0.09	4.61	23.30
平成43年度	8.86	9.25	0.22	0.09	4.80	23.22

※1 粗大ごみにおける可燃性粗大の割合の過去5年間の平均値49.60%を粗大ごみ排出見込み量に乗じた値である。

※2 資源ごみのプラスチック容器包装からの可燃物の割合の過去3年間の平均値8.83%をプラスチック容器包装排出見込み量に乗じた値である。

※3 資源ごみの生ごみからの可燃物の割合の過去3年間の平均値78.10%を生ごみ排出見込み量に乗じた値である。



単位：t/日

	焼却残渣 (10.63%)
平成29年度	2.98
平成30年度	2.96
平成31年度	2.91
平成32年度	2.85
平成33年度	2.79
平成34年度	2.74
平成35年度	2.69
平成36年度	2.64
平成37年度	2.63
平成38年度	2.58
平成39年度	2.57
平成40年度	2.53
平成41年度	2.52
平成42年度	2.48
平成43年度	2.47

年度	搬入量 (t/年)	主灰 (t/年)	残渣率(主灰) (%)	飛灰 (t/年)	残渣率(飛灰) (%)
平成24年度	10892.45	889.00	8.16%	256.16	2.35%
平成25年度	10662.96	908.32	8.52%	259.41	2.43%
平成26年度	10679.92	881.94	8.26%	258.30	2.42%
平成27年度	10670.11	857.75	8.04%	250.08	2.34%
平成28年度	10249.68	843.31	8.23%	246.12	2.40%
		平均値	8.24%	平均値	2.39%
残渣率計				10.63%	

表 3-6-23 ごみ減量効果を考慮したごみ焼却施設における
年間ごみ焼却量の見込み

単位：t/年

	燃えるごみ		粗大ごみ (可燃性) ※1	プラスチック容器包装ペーパー 類からの可燃物 ※2	資源生ごみから の可燃物 ※3	焼却処理量 計
	家庭系	事業系				
平成 29 年度	5,351	4,135	73	26	653	10,238
平成 30 年度	5,201	4,135	73	26	737	10,172
平成 31 年度	5,001	4,055	73	26	821	9,976
平成 32 年度	4,807	3,971	73	26	905	9,782
平成 33 年度	4,621	3,884	73	26	986	9,590
平成 34 年度	4,442	3,800	77	29	1,069	9,417
平成 35 年度	4,267	3,716	77	29	1,150	9,239
平成 36 年度	4,099	3,632	77	29	1,230	9,067
平成 37 年度	3,982	3,632	77	29	1,307	9,027
平成 38 年度	3,829	3,548	77	29	1,383	8,866
平成 39 年度	3,716	3,548	80	29	1,460	8,833
平成 40 年度	3,570	3,464	80	33	1,533	8,680
平成 41 年度	3,464	3,464	80	33	1,606	8,647
平成 42 年度	3,329	3,380	80	33	1,683	8,505
平成 43 年度	3,234	3,376	80	33	1,752	8,475

※1 粗大ごみにおける可燃性粗大の割合の過去 5 年間の平均値 49.60% を粗大ごみ排出見込み量に乗じた値である。

※2 資源ごみのプラスチック容器包装からの可燃物の割合の過去 3 年間の平均値 8.83% をプラスチック容器包装排出見込み量に乗じた値である。

※3 資源ごみの生ごみからの可燃物の割合の過去 3 年間の平均値 78.10% を生ごみ排出見込み量に乗じた値である。

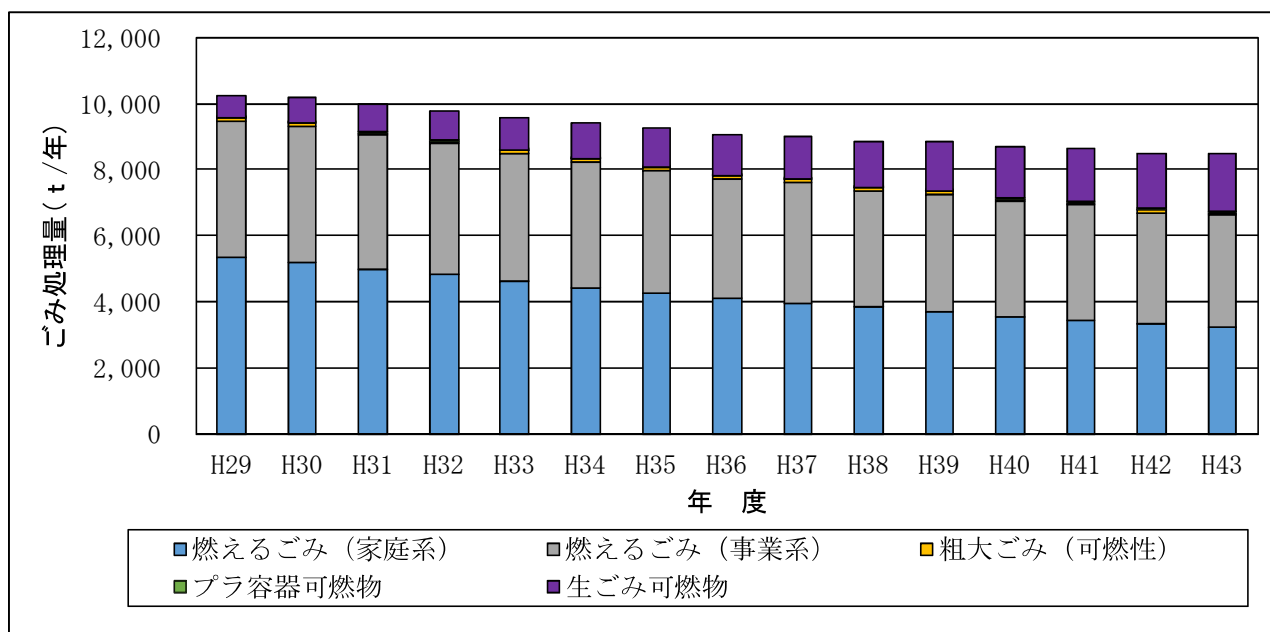


図 3-6-8 ごみ減量効果を考慮したごみ焼却施設における
年間ごみ焼却量の推移

2) ごみの資源化

ごみ減量効果を考慮した資源ごみのごみ処理量の見込みを表 3-6-24~25 及び図 3-6-9 に示します。

目標年次である平成 43 年度における資源ごみのごみ量は、1 日あたりのごみ処理量で 6.81 t/日、年間ごみ処理量で 2,487 t/年、資源化率が 22.83% になるものと想定されます。

表3-6-24 ごみ減量化を考慮した1日あたりの資源ごみの処理量の見込み

単位：t/日

	資源ごみ													計
	カン	ビン	ペットボトル	古紙	牛乳パック	その他紙類(資源物)	乾電池	手づ	蛍光管	古着	古布類	廃食油	小型家電	
平成29年度	0.33	0.87	0.30	2.15	0.02	0.41	0.03	0.20	0.01	0.14	0.01	0.03	0.01	
平成30年度	0.33	0.86	0.30	2.05	0.02	0.42	0.03	0.20	0.01	0.15	0.01	0.03	0.01	
平成31年度	0.32	0.85	0.30	1.95	0.02	0.43	0.03	0.20	0.01	0.16	0.01	0.04	0.01	
平成32年度	0.31	0.83	0.30	1.86	0.02	0.43	0.03	0.20	0.01	0.18	0.01	0.04	0.01	
平成33年度	0.31	0.82	0.30	1.78	0.02	0.44	0.03	0.20	0.01	0.19	0.01	0.04	0.02	
平成34年度	0.30	0.81	0.30	1.70	0.02	0.45	0.03	0.20	0.01	0.20	0.01	0.04	0.02	
平成35年度	0.30	0.80	0.29	1.62	0.02	0.45	0.03	0.20	0.01	0.21	0.01	0.04	0.02	
平成36年度	0.30	0.79	0.29	1.54	0.03	0.46	0.03	0.19	0.01	0.23	0.01	0.05	0.02	
平成37年度	0.29	0.78	0.29	1.47	0.03	0.47	0.03	0.19	0.01	0.24	0.01	0.05	0.02	
平成38年度	0.29	0.77	0.29	1.40	0.03	0.47	0.03	0.19	0.01	0.25	0.01	0.05	0.03	
平成39年度	0.29	0.76	0.29	1.34	0.03	0.48	0.03	0.19	0.01	0.27	0.01	0.05	0.03	
平成40年度	0.29	0.75	0.29	1.28	0.03	0.49	0.03	0.19	0.01	0.28	0.01	0.05	0.03	
平成41年度	0.29	0.74	0.28	1.22	0.03	0.50	0.03	0.19	0.01	0.29	0.01	0.05	0.04	
平成42年度	0.29	0.73	0.28	1.16	0.03	0.50	0.03	0.18	0.01	0.31	0.01	0.05	0.04	
平成43年度	0.29	0.72	0.28	1.11	0.03	0.51	0.03	0.18	0.01	0.32	0.01	0.05	0.05	
備考	7法の推計方法による予測値	7法の推計方法による予測値	7法の推計方法による予測値	7法の推計方法による予測値	7法の推計方法による予測値	7法の推計方法による予測値	7法の推計方法による予測値	7法の推計方法による予測値	7法の推計方法による予測値	7法の推計方法による予測値	7法の推計方法による予測値	7法の推計方法による予測値	7法の推計方法による予測値	

	清掃センターにて回収										合計	
	ふとん等	相大ごみ	計	ふとん類	破砕カマダ	蛍光管	その他家電	その他紙類(資源物)	生ごみ	焼却灰		
平成29年度	0.10	0.01	0.11	0.02	0.22	0.01	0.04	0.70	0.50	0.62	2.10	6.72
平成30年度	0.10	0.01	0.11	0.02	0.22	0.01	0.04	0.72	0.57	0.62	2.19	6.72
平成31年度	0.10	0.01	0.11	0.02	0.22	0.01	0.04	0.74	0.63	0.61	2.26	6.70
平成32年度	0.10	0.01	0.11	0.02	0.22	0.01	0.04	0.76	0.69	0.60	2.33	6.67
平成33年度	0.10	0.01	0.11	0.02	0.22	0.01	0.04	0.77	0.76	0.59	2.40	6.68
平成34年度	0.11	0.01	0.12	0.02	0.22	0.01	0.04	0.78	0.82	0.57	2.45	6.66
平成35年度	0.11	0.01	0.12	0.02	0.22	0.01	0.04	0.80	0.88	0.56	2.52	6.64
平成36年度	0.11	0.01	0.12	0.02	0.22	0.01	0.04	0.82	0.94	0.55	2.59	6.66
平成37年度	0.11	0.01	0.12	0.02	0.22	0.01	0.04	0.84	1.00	0.55	2.67	6.67
平成38年度	0.11	0.01	0.12	0.02	0.22	0.01	0.04	0.86	1.06	0.54	2.74	6.68
平成39年度	0.11	0.01	0.12	0.02	0.22	0.01	0.04	0.88	1.12	0.54	2.82	6.72
平成40年度	0.11	0.01	0.12	0.02	0.22	0.01	0.04	0.89	1.18	0.53	2.88	6.73
平成41年度	0.11	0.01	0.12	0.02	0.22	0.01	0.04	0.91	1.24	0.53	2.96	6.76
平成42年度	0.11	0.01	0.12	0.02	0.22	0.01	0.04	0.93	1.29	0.52	3.02	6.76
平成43年度	0.11	0.01	0.12	0.02	0.22	0.01	0.04	0.95	1.35	0.52	3.10	6.81
備考	7法の推計方法による予測値 抽出率割合25.4%	7法の推計方法による予測値 抽出率割合33.2%	過去3年間の平均値	過去3年間の平均値	過去3年間の平均値	過去3年間の平均値	過去3年間の平均値	抽出率割合9.1% 年間平均割合17%	抽出率割合21.9% 年間平均割合19%	抽出率割合27.2% 年間平均割合23%	7法の推計方法による予測値	7法の推計方法による予測値

表3-6-25 ごみ減量化を考慮した資源ごみの年間処理量の見込み

単位：t/年

	資源ごみ													計
	カン	ビン	ハットホストル	古紙	牛乳パック	その他紙類	乾電池	チップ	蛍光管	古着	古布類	廃食油	小型家電	
平成29年度	120.45	317.55	109.50	784.75	7.30	149.65	10.95	73.00	3.65	51.10	3.65	10.95	3.65	
平成30年度	120.45	313.90	109.50	748.25	7.30	153.30	10.95	73.00	3.65	54.75	3.65	10.95	3.65	
平成31年度	116.80	310.25	109.50	711.75	7.30	156.95	10.95	73.00	3.65	58.40	3.65	14.60	3.65	
平成32年度	113.15	302.95	109.50	678.90	7.30	156.95	10.95	73.00	3.65	65.70	3.65	14.60	3.65	
平成33年度	113.15	299.30	109.50	649.70	7.30	160.60	10.95	73.00	3.65	69.35	3.65	14.60	7.30	
平成34年度	109.50	295.65	109.50	620.50	7.30	164.25	10.95	73.00	3.65	73.00	3.65	14.60	7.30	
平成35年度	109.50	292.00	105.85	591.30	7.30	164.25	10.95	73.00	3.65	76.65	3.65	14.60	7.30	
平成36年度	109.50	288.35	105.85	562.10	10.95	167.90	10.95	69.35	3.65	83.95	3.65	18.25	7.30	
平成37年度	105.85	284.70	105.85	536.55	10.95	171.55	10.95	69.35	3.65	87.60	3.65	18.25	7.30	
平成38年度	105.85	281.05	105.85	511.00	10.95	171.55	10.95	69.35	3.65	91.25	3.65	18.25	10.95	
平成39年度	105.85	277.40	105.85	489.10	10.95	175.20	10.95	69.35	3.65	98.55	3.65	18.25	10.95	
平成40年度	105.85	273.75	105.85	467.20	10.95	178.85	10.95	69.35	3.65	102.20	3.65	18.25	10.95	
平成41年度	105.85	270.10	102.20	445.30	10.95	182.50	10.95	69.35	3.65	105.85	3.65	18.25	14.60	
平成42年度	105.85	266.45	102.20	423.40	10.95	182.50	10.95	65.70	3.65	113.15	3.65	18.25	14.60	
平成43年度	105.85	262.80	102.20	405.15	10.95	186.15	10.95	65.70	3.65	116.80	3.65	18.25	18.25	
備考	7法の推計方法による予測値	7法の推計方法による予測値	7法の推計方法による予測値	7法の推計方法による予測値	7法の推計方法による予測値	7法の推計方法による予測値	7法の推計方法による予測値	7法の推計方法による予測値	7法の推計方法による予測値	7法の推計方法による予測値	7法の推計方法による予測値	7法の推計方法による予測値	7法の推計方法による予測値	

	清掃センターより回収										合計	資源化率	
	ふとん等	相大資源	計	ふとん類	破砕カマフ	蛍光管	その他家電	生ごみ	焼却灰	計			
平成29年度	36.50	3.65	40.15	6.30	78.98	3.65	14.22	255.50	226.30	767.45	2,453.75	19.26%	
平成30年度	36.50	3.65	40.15	6.30	78.98	3.65	14.22	262.80	226.30	800.30	2,453.75	19.39%	
平成31年度	36.50	3.65	40.15	6.30	78.98	3.65	14.22	270.10	222.65	825.85	2,446.45	19.66%	
平成32年度	36.50	3.65	40.15	6.30	78.98	3.65	14.22	277.40	219.00	851.40	2,435.50	19.92%	
平成33年度	36.50	3.65	40.15	6.30	78.98	3.65	14.22	281.05	215.35	876.95	2,439.15	20.29%	
平成34年度	40.15	3.65	43.80	6.30	78.98	3.65	14.22	284.70	208.05	895.20	2,431.85	20.55%	
平成35年度	40.15	3.65	43.80	6.30	78.98	3.65	14.22	292.00	204.40	920.75	2,424.55	20.83%	
平成36年度	40.15	3.65	43.80	6.30	78.98	3.65	14.22	299.30	200.75	946.30	2,431.85	21.23%	
平成37年度	40.15	3.65	43.80	6.30	78.98	3.65	14.22	306.60	200.75	975.50	2,435.50	21.32%	
平成38年度	40.15	3.65	43.80	6.30	78.98	3.65	14.22	313.90	197.10	1,001.05	2,439.15	21.66%	
平成39年度	40.15	3.65	43.80	6.30	78.98	3.65	14.22	321.20	197.10	1,030.25	2,453.75	21.85%	
平成40年度	40.15	3.65	43.80	6.30	78.98	3.65	14.22	324.85	193.45	1,052.15	2,457.40	22.19%	
平成41年度	40.15	3.65	43.80	6.30	78.98	3.65	14.22	332.15	193.45	1,081.35	2,468.35	22.33%	
平成42年度	40.15	3.65	43.80	6.30	78.98	3.65	14.22	339.45	189.80	1,103.25	2,468.35	22.63%	
平成43年度	40.15	3.65	43.80	6.30	78.98	3.65	14.22	346.75	189.80	1,132.45	2,486.60	22.83%	
備考	抽出予測値に対する抽出率5.4%	抽出予測値に対する抽出率3.24%	過去3年間の平均値	過去3年間の平均値	過去3年間の平均値	過去3年間の平均値	過去3年間の平均値	抽出予測値に対する抽出率1.1%	抽出予測値に対する抽出率3.3%	抽出予測値に対する抽出率2.23%	抽出予測値に対する抽出率2.23%	抽出予測値に対する抽出率2.23%	抽出予測値に対する抽出率2.23%

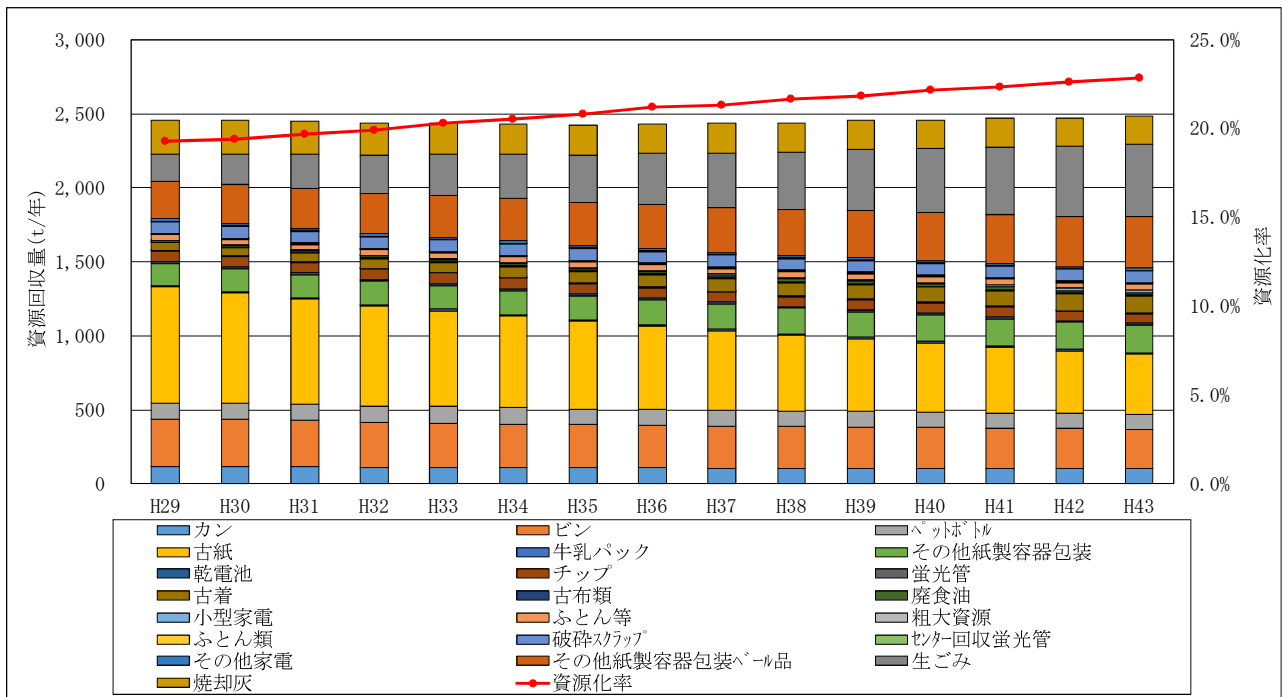


図 3-6-9 ごみ減量効果を考慮した不燃物資源化施設における年間ごみ処理量の推移

3) 最終処分

ごみ減量効果を考慮した埋立処分量の見込みを表 3-6-26 ~27 及び図 3-6-10 に示します。

目標年次である平成 43 年度における最終処分場の埋立処分量は、1 日あたりの埋立処分量で 3.19 t / 日、年間埋立処分量で 1,163 t / 年が見込まれます。

表 3-6-26 ごみ減量効果を考慮した 1日あたりの埋立処分量の見込み

単位：t/日

区分 年度	焼却灰 ^{※1}	不燃残渣 ^{※2}	粗大不燃 ^{※3}	側溝泥 ^{※4}	埋立処分量 計
平成29年度	2.36	0.61	0.09	0.69	3.75
平成30年度	2.34	0.60	0.09	0.69	3.72
平成31年度	2.30	0.60	0.09	0.69	3.68
平成32年度	2.25	0.58	0.09	0.69	3.61
平成33年度	2.20	0.56	0.09	0.69	3.54
平成34年度	2.17	0.55	0.09	0.69	3.50
平成35年度	2.13	0.53	0.09	0.69	3.44
平成36年度	2.09	0.51	0.09	0.69	3.38
平成37年度	2.08	0.51	0.09	0.69	3.37
平成38年度	2.04	0.50	0.09	0.69	3.32
平成39年度	2.03	0.49	0.10	0.69	3.31
平成40年度	2.00	0.48	0.10	0.69	3.27
平成41年度	1.99	0.47	0.10	0.69	3.25
平成42年度	1.96	0.45	0.10	0.69	3.20
平成43年度	1.95	0.45	0.10	0.69	3.19

※1 焼却残渣量から焼却灰資源化見込み量を除いた値である。

※2 燃えないごみにおける不燃残渣の割合の過去5年間の平均値62.71%を燃えないごみの排出見込み量に乗じた値である。

※3 粗大ごみにおける不燃残渣の割合の過去5年間の平均値21.72%を燃えないごみの排出見込み量に乗じた値である。

※4 側溝汚泥の過去5年間の平均搬入量の値である。

表 3 - 6 - 27 ごみ減量効果を考慮した年間埋立処分量の見込み

単位：t/年

区 分 年 度	焼却灰※1	不燃残渣※2	粗大不燃※3	側溝泥※4	埋立処分量 計
平成 29 年度	861	223	33	250	1,367
平成 30 年度	854	219	33	250	1,356
平成 31 年度	840	219	33	250	1,342
平成 32 年度	821	212	33	250	1,316
平成 33 年度	803	204	33	250	1,290
平成 34 年度	792	201	33	250	1,276
平成 35 年度	777	193	33	250	1,253
平成 36 年度	763	186	33	250	1,232
平成 37 年度	759	186	33	250	1,228
平成 38 年度	745	183	33	250	1,211
平成 39 年度	741	179	37	250	1,207
平成 40 年度	730	175	37	250	1,192
平成 41 年度	726	172	37	250	1,185
平成 42 年度	715	164	37	250	1,166
平成 43 年度	712	164	37	250	1,163

※1 焼却残渣量から焼却灰資源化見込み量を除いた値である。

※2 燃えないごみにおける不燃残渣の割合の過去5年間の平均値62.71%を燃えないごみの排出見込み量に乗じた値である。

※3 粗大ごみにおける不燃残渣の割合の過去5年間の平均値21.72%を燃えないごみの排出見込み量に乗じた値である。

※4 側溝汚泥の過去5年間の平均搬入量の値である。

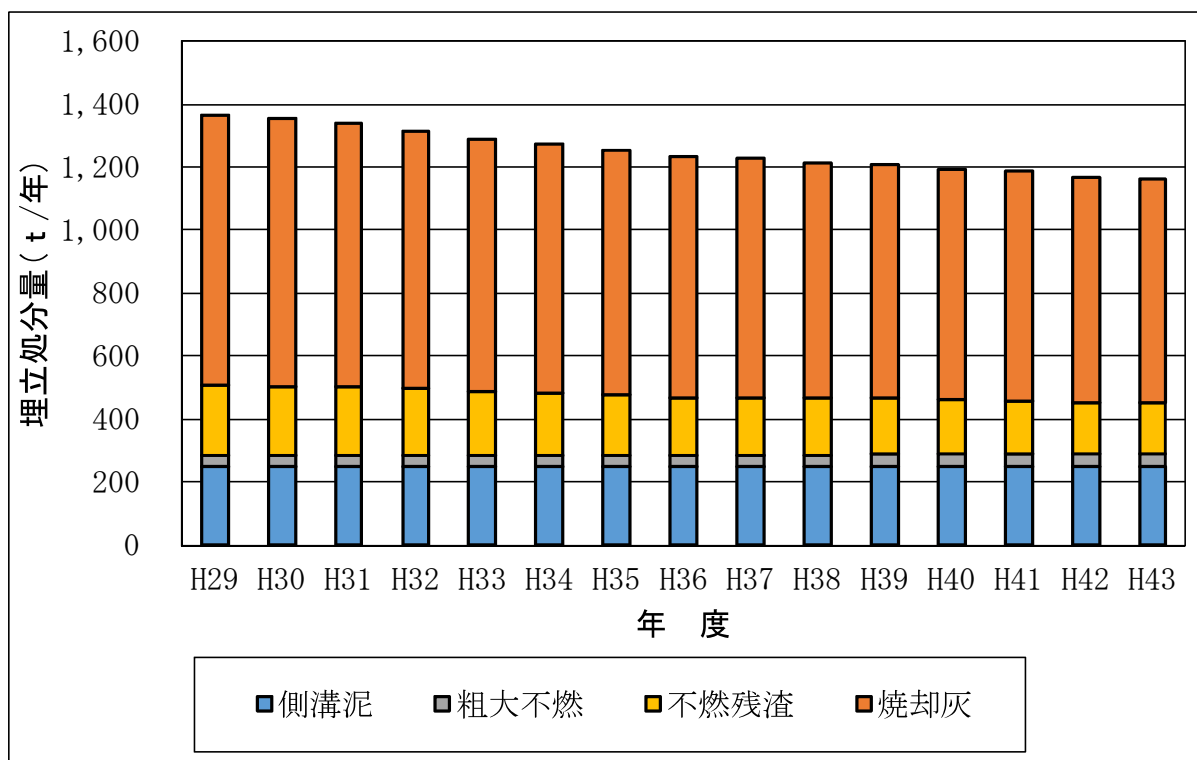


図 3 - 6 - 10 ごみ減量効果を考慮した年間埋立処分量の推移

5. ごみの適正処理に関する基本的事項

1) 分別収集計画

平成 29 年度以降におけるごみの種類及び分別の区分については表 3-6-28 に示すとおりとします。

表 3-6-28 分別収集計画

分別区分	出す場所・出し方	主な種類	処理手数料	
燃えるごみ	ごみステーション ・有料ごみ袋	生ごみ、紙くず類、紙おむつ、小型プラスチック製品、ビデオテープ、カセットテープ、CD、皮革類、衣類など	有 料	
燃えないごみ	ごみステーション ・有料ごみ袋	ガラス類、グラス、コップ、セトモノ類（茶碗、皿などの陶磁器類）、電球、なべ、やかん、フライパン、小型家電製品、電気コードなど		
粗大ごみ	戸別収集 ・粗大ごみ処理券	家具類、寝具（布団等）、家庭電気製品（家電リサイクル品は除く）、石油器具類、OA機器（パソコンは除く）、大型プラスチック製品	無 料	
資源ごみ	古紙類	資源ごみステーション 資源回収棟 ・しばって束ねる		新聞、段ボール、雑誌・チラシ、その他紙製容器包装（紙箱・紙袋・包装紙）
	カン	資源ごみステーション 葛巻・今町資源回収棟 ・黄色のコンテナ		ビール・ジュース・コーヒーなどの缶、缶詰、スプレー缶、菓子缶など
	ビン	資源ごみステーション 葛巻・今町資源回収棟 ・青色のコンテナ		食品類のビン、飲料水等のビン
	ペットボトル	資源ごみステーション 葛巻・今町資源回収棟 ・透明、半透明の袋（レジ袋使用可）		清涼飲料、酒及び調味料の容器で「PET 1」の表示があるもの
	牛乳パック	葛巻・今町資源回収棟 拠点回収		牛乳、ジュース、その他紙パック製品で「紙パックリサイクルマーク」のあるもの
	古着・古布類	葛巻資源回収棟 葛巻地区ふるさとセンター ・透明、半透明の袋（レジ袋使用可）		きもの、シャツ、生地等の古着・古布 布団や座布団などの綿の入ったものは対象外
	廃食用油	市内回収ボックス		サラダ油、ごま油など ラード、バター、エンジンオイル、燃料油等は対象外
	小型家電	葛巻資源回収棟 拠点回収 ・回収ボックス		縦15cm×横35cm×奥行20cm以下の小型のもので電気または電池で動くもの デジタルカメラ、電話機、電卓など
	生ごみ	分別地区のみ		野菜くず、残飯など
	乾電池	資源ごみステーション 葛巻・今町資源回収棟 ・緑色のコンテナ		マンガン乾電池及びアルカリ乾電池
	プラスチック製容器包装	ごみステーション ・透明、半透明の袋（レジ袋使用可）		トレイ、レジ袋、シャンプーの容器、キャップ、菓子の外装・個装袋、弁当・カップめん容器など
	蛍光灯等	葛巻資源回収棟 ・回収ボックス		蛍光灯、水銀体温計、水銀温度計
	枝木	清掃センター 葛巻資源回収棟 ・しばって束ねる	せん定枝	

2) 収集・運搬計画

平成 30 年度以降における収集・運搬計画について、家庭系ごみは表 3-6-29 に、事業系ごみは表 3-6-30 に示すとおりとします。

表 3 - 6 - 29 家庭系ごみの収集体制

分別区分	収集頻度	排出方法	収集主体	収集方法	
燃えるごみ	週 3 回	指定ごみ袋	委託業者	ごみステーション	
燃えないごみ	月 1 回	指定ごみ袋	委託業者	ごみステーション	
粗 大 ご み	5 回 / 週	粗大ごみ処理券	委託業者	戸別収集	
資源ごみ	古紙類	月 1 回	しばって束ねる	委託業者	資源ごみステーション 葛巻・今町資源回収棟
	カン	月 1 回	黄色のコンテナ	委託業者	資源ごみステーション 葛巻・今町資源回収棟
	ビン	月 1 回	青色のコンテナ	委託業者	資源ごみステーション 葛巻・今町資源回収棟
	ペットボトル	月 1 回	透明、半透明の袋 (レジ袋使用可)	委託業者	資源ごみステーション
	牛乳パック	月 1 回	しばって束ねる	委託業者	葛巻・今町資源回収棟
	古着・古布類	月 1 回	透明、半透明の袋 (レジ袋使用可)	委託業者	葛巻資源回収棟 葛巻地区ふるさとセンター
	廃食用油	月 1 回	回収ボックス	委託業者	拠点回収 (市内 8 ヶ所)
	小型家電	月 1 回	回収ボックス	委託業者	葛巻資源回収棟 拠点回収 (市内 3 ヶ所)
	生ごみ	週 2 回	指定ごみ袋	委託業者	分別地区のみ
	乾電池	月 1 回	緑色のコンテナ	委託業者	資源ごみステーション 葛巻・今町資源回収棟
	プラスチック製容器包装	週 1 回	透明、半透明の袋 (レジ袋使用可)	委託業者	ごみステーション
	蛍光管等	月 1 回	回収ボックス	委託業者	葛巻資源回収棟

表 3 - 6 - 30 事業系ごみの収集体制

分別区分	収集頻度	収集主体	収集方法
燃えるごみ	随 時	許可業者・排出事業者	個別収集
燃えないごみ	随 時	許可業者・排出事業者	個別収集
資源ごみ	随 時	許可業者・排出事業者	個別収集

3) 中間処理及び最終処分計画

平成 30 年度におけるごみの中間処理及び最終処分計画について表 3 - 6 - 31 に示します。また、新ごみ処理施設稼働予定後の平成 31 年 4 月以降のごみの中間処理及び最終処分計画を表 3 - 6 - 32 に示します。

表 3-6-31 ごみの中間処理及び最終処分計画（平成 30 年度）

区 分	施 設	主体	運営・管理	
中間処理	見附市 清掃センター	焼却処理	本市	委託業者
		破砕処理 選別・圧縮処理 チップ化処理		
最終処分	見附市最終処分場	本市	委託業者	

表 3-6-32 ごみの中間処理及び最終処分計画（平成 31 年 4 月以降）

区 分	施 設	主体	運営・管理	
中間処理	新ごみ処理施設 (ごみ焼却処理施設＋ 不燃物資源化施設)	焼却処理施設	本市	特別目的会社 (見附グリーンテック(株))
		破砕処理 選別・圧縮処理 チップ化処理		
最終処分	見附市最終処分場	本市	委託業者	

(1) ごみ焼却施設の必要能力

ごみ排出量の予測結果に基づいた必要最大処理能力は次のとおりであり、既存の施設においては 30% 程度の余裕を見込むことができます。

また、新ごみ処理施設が供用開始する予定の平成 31 年度からは、平成 34 年度までは計画処理能力を超える予測となっているため、延長運転にて対応するものとします。それ以降は必要処理能力が計画処理能力を下回ることから計画通りの処理を進めていき、平成 43 年度においては 10% 程度の余裕を見込むことができます。ただし、ごみの排出抑制状況や観光客の入り込み数により大きく変動することが考えられるので、定期的に見直す必要があります。

【ごみ焼却施設】

ごみ排出量の予測結果に基づいた必要最大処理能力は次のとおりとなります。

$$\text{必要最大処理能力} = \text{最大日平均処理量} \div \text{実稼働率} \div \text{調整稼働率}$$

よって、ごみ焼却施設における必要最大処理能力は、
最大日平均処理量が 27.87 t / 日（平成 30 年度）、実稼働率を
0.70、調整稼働率を 0.96 とすると、

$$\begin{aligned} \text{必要最大処理能力} &= 27.87 \text{ t / 日} \div 0.70 \div 0.96 \\ &= 41.47 \text{ t / 日} \div \underline{42 \text{ t / 日}} \text{ (30\% の余裕)} \end{aligned}$$

ごみ焼却施設における必要処理能力の予測を表3-6-33に示します。

表3-6-33 ごみ焼却施設における必要処理能力の予測

【ごみ処理施設：現有処理能力 60 t/16h(平成31年度からは38 t/16h)】

単位：t/日

	焼却処理 対象ごみ量		実稼働率		調整稼働率		必要 処理能力
平成29年度	28.05	÷	0.70	÷	0.96	=	41.74
平成30年度	27.87	÷	0.70	÷	0.96	=	41.47
平成31年度	27.33	÷	0.70	÷	0.96	=	40.67
平成32年度	26.80	÷	0.70	÷	0.96	=	39.88
平成33年度	26.27	÷	0.70	÷	0.96	=	39.09
平成34年度	25.80	÷	0.70	÷	0.96	=	38.39
平成35年度	25.31	÷	0.70	÷	0.96	=	37.66
平成36年度	24.84	÷	0.70	÷	0.96	=	36.96
平成37年度	24.73	÷	0.70	÷	0.96	=	36.80
平成38年度	24.29	÷	0.70	÷	0.96	=	36.15
平成39年度	24.20	÷	0.70	÷	0.96	=	36.01
平成40年度	23.78	÷	0.70	÷	0.96	=	35.39
平成41年度	23.69	÷	0.70	÷	0.96	=	35.25
平成42年度	23.30	÷	0.70	÷	0.96	=	34.67
平成43年度	23.22	÷	0.70	÷	0.96	=	34.55

(2) 最終処分場における必要埋立容量と委託処理量の見込み

平成43年度までの必要埋立容量の予測を表3-6-34に示します。平成43年度における必要埋立容量は、焼却残渣量が83m³、不燃残渣量が133m³、粗大不燃量が30m³、側溝泥量が203m³であり、覆土を含めた埋立量は505m³と見込まれます。

平成29年度から平成43年度までの必要埋立容量は8,040m³と見込まれます。

また、平成43年度までの焼却残渣の委託処理量の予測を表3-6-35に示します。平成43年度における委託処分量は、焼却灰が478t、飛灰が131t、資源化量が190tと見込まれます。

なお、焼却残渣の処分量に関しては、新ごみ処理施設が稼働後、処分量が変更になるものと想定されますので、適宜見直しが必要となります。

表 3-6-34 必要埋立容量の予測

	焼却残渣 [※] (自処分場処理) t/日	焼却残渣 (自処分場処理) t/年	焼却残渣 (自処分場処理) m ³ /年	不燃残渣 (自処分場処理) t/日	不燃残渣 (自処分場処理) t/年	不燃残渣 (自処分場処理) m ³ /年	粗大不燃 (自処分場処理) t/日	粗大不燃 (自処分場処理) m ³ /年	粗大不燃 (自処分場処理) t/年	側溝泥 (自処分場処理) t/日	側溝泥 (自処分場処理) t/年	側溝泥 (自処分場処理) m ³ /日	年間埋立量 t/年	年間埋立量 m ³ /年	埋土量 t/年	埋土量 m ³ /年	埋立総量 t/年	埋立総量 m ³ /年	埋立総量 m ³	埋立総量 m ³
平成29年度	0.34	124	101	0.61	223	181	0.09	33	27	0.69	250	203	630	512	61	102	732	576		
平成30年度	0.33	120	98	0.60	219	178	0.09	33	27	0.69	250	203	622	506	63	101	723	569	1,145	1,145
平成31年度	0.33	120	98	0.60	219	178	0.09	33	27	0.69	250	203	622	506	63	101	723	569	1,714	1,714
平成32年度	0.32	117	95	0.58	212	172	0.09	33	27	0.69	250	203	612	497	62	99	711	559	2,273	2,273
平成33年度	0.31	113	92	0.56	204	166	0.09	33	27	0.69	250	203	600	488	61	98	698	549	2,822	2,822
平成34年度	0.31	113	92	0.55	201	163	0.09	33	27	0.69	250	203	597	485	61	97	694	546	3,368	3,368
平成35年度	0.30	110	89	0.53	193	157	0.09	33	27	0.69	250	203	580	476	59	95	681	535	3,903	3,903
平成36年度	0.30	110	89	0.51	186	151	0.09	33	27	0.69	250	203	579	470	59	94	673	529	4,432	4,432
平成37年度	0.30	110	89	0.51	186	151	0.09	33	27	0.69	250	203	579	470	59	94	673	529	4,961	4,961
平成38年度	0.28	102	83	0.50	183	149	0.09	33	27	0.69	250	203	568	462	58	92	660	520	5,481	5,481
平成39年度	0.28	102	83	0.49	179	146	0.10	37	30	0.69	250	203	568	462	58	92	660	520	6,001	6,001
平成40年度	0.28	102	83	0.48	175	142	0.10	37	30	0.69	250	203	561	458	58	92	656	516	6,517	6,517
平成41年度	0.28	102	83	0.47	172	140	0.10	37	30	0.69	250	203	561	456	57	91	652	513	7,030	7,030
平成42年度	0.28	102	83	0.45	164	133	0.10	37	30	0.69	250	203	553	449	56	90	643	505	7,535	7,535
平成43年度	0.28	102	83	0.45	164	133	0.10	37	30	0.69	250	203	553	449	56	90	643	505	8,040	8,040

※1 焼却残渣発生見込み量から焼却残渣資源化見込み量と委託処分見込み量を除いた値である。

注) 焼却残渣、不燃残渣、粗大不燃、側溝泥の体積換算係数は、1.23t/m³とした。また、埋土量は埋立量の20.0%として計算し、体積換算係数は、1.60t/m³とした。

表 3 - 6 - 35 委託処分量及び資源化量の予測

	焼却灰 ^{※1} (委託処分) t/日	焼却灰 (委託処分) t/年	飛灰 ^{※1} (委託処分) t/日	飛灰 (委託処分) t/年	焼却灰 (資源化) t/日	焼却灰 (資源化) t/年	委託処分・ 資源化処理 計 t/年
平成29年度	1.59	580	0.43	157	0.62	226	963
平成30年度	1.58	577	0.43	157	0.62	226	960
平成31年度	1.55	566	0.42	153	0.61	223	942
平成32年度	1.51	551	0.42	153	0.60	219	923
平成33年度	1.49	544	0.40	146	0.59	215	905
平成34年度	1.46	533	0.40	146	0.57	208	887
平成35年度	1.44	526	0.39	142	0.56	204	872
平成36年度	1.41	515	0.38	139	0.55	201	855
平成37年度	1.40	511	0.38	139	0.55	201	851
平成38年度	1.38	504	0.38	139	0.54	197	840
平成39年度	1.37	500	0.38	139	0.54	197	836
平成40年度	1.35	493	0.37	135	0.53	193	821
平成41年度	1.34	489	0.37	135	0.53	193	817
平成42年度	1.32	482	0.36	131	0.52	190	803
平成43年度	1.31	478	0.36	131	0.52	190	799

※1 焼却残渣における委託処理の割合の直近過去3年間の平均値（焼却灰：87.04%、飛灰：81.68%）を焼却残渣の排出見込み量に乗じた値である。また、焼却灰と飛灰の排出見込み量は、過去5年間の発生割合の平均値（焼却灰：77.52%、飛灰：22.48%）を焼却残渣の排出見込み量に乗じた値である。

6. ごみ処理施設の整備に関する事項

処理量の見通しと処理の方法及びその処理主体で示したように、平成 43 年度までのごみ処理状況を考えると、収集・運搬は現況の体制を用いて運営を行うことができると想定されます。

また、中間処理施設に関しては、平成 31 年度からは特別目的会社（SPC）と 20 年間の長期運営業務委託により運営・管理されることとなっています。

運営・管理の主体は特別目的会社となりますが、適正な運営・管理が行われているかどうかをモニタリングして、適正に施設の運営・管理が行われているか専門家を交えて確認していく必要があります。

最終処分場に関しては、適正かつ合理的な運営を行うことで施設の延命化を図りながら、次期の最終処分場の整備について検討することが必要であると思われま

1) 最終処分場の維持管理

本市の最終処分場は供用開始から 36 年以上が経過し、経年劣化による機器の故障が増えることが予想されます。また、埋立の進捗による浸出水処理施設への負荷の増大が考えられるため、主要な設備については、定期点検の結果をもとにして早めの補修を行うとともに、関連設備の不具合が主要設備の不具合を誘発しないように補修を行っていきます。

2) 将来の最終処分場整備方針と整備に係る事務手続きの検討

最終処分場の建設にあたっては、建設用地の選定・購入交渉、建設までの準備（住民説明・同意の取得や環境アセスメントの実施）を経て建設工事着工となり、新たな処理施設が供用開始となるまで 8 年程度と長期間にわたるプロジェクトとなります。

最終処分場は、平成 28 年度末における残容量が約 11,000m³となっており、平成 43 年度における残容量は約 3,000m³となることが予測されます。現状の埋立容量で推移していくとすれば、平成 48 年度～49 年度には埋立処分が終了することが見込まれますが、災害等が起こった場合には、それより早い時期での埋立終了も予測されます。したがって、計画的に将来の最終処分場整備に対する必要な計画・調査等を進めていく必要があります。

最終処分場における今後の整備としては、埋立処分が平成 48 年度～49 年度に完了することが見込まれるため、平成 49 年度～50 年度において最終覆土を実施する必要があります。これにより、処分場に降った雨水の 7 割程度を排除することができ、浸出水処理施設の処理負荷を低減することができます。

3) 堆肥化処理施設整備の検討

平成 24 年度より生ごみ堆肥化処理に関する実証実験を継続的に実施しており、堆肥化処理する処理対象物や堆肥の利用先等について検討してきました。

今後、堆肥化処理施設を整備するに当たり、検討しなければならない項目は次のとおりです。

① 焼却処理と堆肥化処理における費用対効果

新ごみ処理施設で焼却処理する場合と堆肥化処理する場合の運営費(建設費、維持管理費等)を比較し、焼却処理する場合と比較して費用対効果が得られるかどうかを検討する必要があります。

② 堆肥の利用先もしくは使用方法

堆肥化処理施設を整備した場合、堆肥の利用先もしくは使用方法により堆肥のストックヤードの整備規模が大きく異なります。

例えば、堆肥の利用先が田んぼや畑になると、堆肥を使用する時期が年 2 回程度になるものと想定されます。

この点についても早急に検討する必要があります。

7. その他の施策

1) 住民に対する広報、啓発活動

ごみの排出抑制や再資源化のための分別等を周知していくことは、本市のごみ処理施策を遂行する上で重要なことでもあります。また、適正なごみ処理方法を示して不法投棄等を抑制していくことは地域の自然環境を守る上でも大切なことです。

したがって、市の広報紙等により周知活動を行ってもらうとともに、施設見学を積極的に受け入れることで啓発活動を行っていくこととします。

2) 適正処理困難物に対する対処方針

適正処理困難物の処分については、排出者の自己処理を原則とし業界団体との連携を図りながら、処分・回収ルートの確立を図ることとします。

水銀等の有害な重金属が含まれる廃棄物については、国、県の関係機関と連携を取り適正な処理に努めます。

また、医療系特別管理一般廃棄物については、医療機関による適正な処理ルートを確保するように、医師会や環境センター等各関係機関と連携を取り指導を行います。

本市における適正処理困難物の種類とその処理計画を表3-6-36に示します。

表3-6-36 適正処理困難物の種類とその処理計画

種 類	処理・処分の方法
蛍光管、水銀体温計、水銀温度計、乾電池	市で回収し、民間の処理業者に処分を委託する。
テレビ、洗濯機、衣類乾燥機、冷蔵庫、冷凍庫 エアコン、パソコン、消火器、ガスボンベ 農機具、農業用ハウス等の廃材、建築廃材 自動車等の部品（バッテリー、タイヤ、ホイール等） 産業廃棄物	排出者による処分 (産業廃棄物に該当するものは産業廃棄物処理施設で処分) (一般廃棄物に該当するものは市内の一般廃棄物許可業者で処分)

3) 災害時における対策

地震及び豪雨による水害等の自然災害又は不慮の事態が発生した場合は、地域防災計画により決められた対策に基づいて行動します。災害時の具体的な対策については次のとおりです。

- ・ 地震や豪雨等がおさまり次第、廃棄物処理施設の被害状況を確認します。
- ・ ごみ処理施設が運転不能となった場合には、速やかに環境センター及び新潟県災害対策本部と連携して、近隣のごみ処理施設にて処理できる体制を整えます。

- ・ 災害時には大量のごみが搬入されるため、ごみ処理場にて災害ごみを保管できなくなるおそれがあります。被害範囲が本市全域に及ぶようであれば災害ごみの一時保管場所を決め、そこからごみ処理施設へ搬入したほうが効率的な処理が可能となります。なお、一時保管場所は広くて交通のアクセスが良い場所を選定します。

また、災害ごみの保管や処理・処分方法については、市職員だけでは対応しきれない場合もあるので、災害発生の初期段階から産業廃棄物処理業者や廃棄物コンサルタントの協力の下で行うことを検討します。

4) 多量の一般廃棄物の受入方法

一時的に多量に排出される一般廃棄物は、原則として受け入れるものとしませんが、排出に際しては通常のごみ処理業務に支障をきたさない程度の量に分割して搬入してもらうように指導します。